

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	龍南
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 1 1 2 : 9 3 - 1 1 7
Issue date	1905-06-19
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5850">http://hdl.handle.net/2298/5850</a>
Right	

## 龍 南

### ○送卒業生諸君

悠々として蒼晏を行く雲翳、潺々として曠原を流るゝ江水、吁嗟人生何ぞ夫れ而く彼に似たるの甚だしきや、吾等が龍山の麓松籟清き翠園裡の人となりてより僅かに歳余、春宵の殘夢尙は未だ消ねやらざるに今遠く諸兄の啓行を送らざる可からず、然り吾等は諸兄の發程を祝せんとして龍南の朝の野に立てる也。さあれ燦として希望と意氣とに充滿せる曙光の色華やかに輝きつゝある諸兄の前途を矚望すれば快々乎たり吾等、豈喃喃徒らに別離の悲を訴ふるの愚を學ぶものならんや。

回顧すれば初め單身孤影閭門を辭し來つて此地に學びし吾等は彼岸の花に憧憬れ只管之を得むことにのみ汲々として而も無經驗なる舵手の、

學界の激浪澎湃たる洋心幾度か其の操縦を誤らんとしき、此の危期に際し自ら確固たる信念の下に専心一意孜孜として深厚なる指導訓戒の勞を執り以て穩波洋洋たる吾等の今日あらしめしもの、實に兄等先輩諸君なりし也、是れ此の光榮ある袂別の時に臨み、滿腔の感謝を捧けると同時に、自ら又此の萬分にだも酬ゆる無かりし吾等の過去を顧み忖心大に安からざるものゝ存する所以なり。

吾等は更に過去の一年を以て實に意義ある一年となさんとするものなり、我帝國が對外的偉大なる主義の發展を試み併せて日東島國青年の活動が世界の耳目を聳動せしめ彼等をして羨慕措く能はざらしめたる是なり、諸兄は内に燃ゆるが如き熱精と牢乎たる悟覺とを抱懷し此の意義ある年の上に立ちて將に大鵬の一鼓翼を試みんとせらる、吾等は彼の狡美浮華の弊風を斥け毫末の粉飾をも許さざる眞乎圓滿なる活精神の表

現として龍南の健兒が年來の主張たる豪氣朴訥が兄等の手により現社會に實現し遂には宇内を風靡し壓倒すべき時期の近づきしを祝せずんばあらざる也、乞ふ將に龍南の天地を去らんとする諸兄國家の爲め將た又現代青年の爲め幸に自重せられよ、

東十里岬として峙つ蘇嶺の雄渾豪放なる容姿は吾等今茲に説かじ、思ふ東台の月洛城の花、是れ蓋し兄等か錦心繡腸更に一段の美を副ふるもの、行けや而して大に自然と共に快遊を試みよ。謹で此啓行を送る。

### ○龍南の新主義

主義の自覺は、自我發展の根本也、要諦なり、人生の意義と、生存の價值とを解釋す可き、唯一の鍵鑰なり、活動の源泉なり、奮闘の動機なり、主義なき人生は、意義なし、活動なし、意義なく活動なき生存は、價值なし責任なし生命なし

○○○○  
きに若かず、

九十四

嚴として海風怒濤の間に聳立するは、巨巖の態に非ずや、潮の漲落は彼の相關せざる所、蠱として天風怒號の中に立つて、動かざるは、山上の巨木に非ずや、黑風白雨は彼の意に介せざる所、主義の人は、是れ海中の巨巖、山嶺の大木乎、眞理は輿論の反對なり、喧々たる衆愚の聲は、彼の耳朵に入らず、汝々たる褒貶の聲は、彼の關知する所にあらず、石に匪ず轉ず可からず、席に非ず卷く可からず、然も一度其の主義を標榜して立つや、疾風迅雷、圭角稜々、其目的を達せずむば止まず、ノックスは然りき、ルソーは然りき、あゝ我今にして、彼等を讀せざるを得ざるなり、更に滿腔の喜悦極まつて、泣かざるを得ざるなり、主義の人は熱血の子なり、涙の子なり、リンコーンを見よ、テサールを見よ、胸中の焔、燃わては炎々昊天をつき、愛の情懷は、花の朝露に濡ふに似たり、あゝ我

一技の筆の神聖を瀆さむ事を恐れ且つ耻づ、故に茲に之れを明言せずして唯だ活眼の士の觀察如何に任せむのみ、獨り吾人は之れが爲めに一つの問題を提出せむ乎、曰く青年の本領を默考せよ。

○青年の本領とは何ぞや、答ふるに剛毅質朴を以てする大いに可なり、勸儉尙武を以てする亦然り、是れ斷々乎として動かすべからざる吾人の主張なり、吾人は之れを國にするもせざるも致々としてその實行に、汲々として發揮に勉むべく、以て青年の本領は遺憾なく旌表せらるべし、剛毅質朴の四文字は眞に吾人青年の金科玉條として長へにその美を成なさむか、日帝國の前途は洋々として春海の如くならむ。

○されど野に叫ぶ人の聲に聞かずや、そは剛毅質朴を咀ふものに非ずや、そは勸儉尙武を嘲ふものに非ずや、暫く何の故ぞに問ふを止めて、時代の傾向思潮を見よ、敵は既に肉薄し來れり

區々たる作戦計画も風生の談論も遂に戦を取つて立つの果斷に若かず、然らば果斷とは何ぞや、曰く實力なり、實力とは何ぞや、曰く之れに向つて直進奮闘する無限絶大の「熱血」即ち之れなり。

○云はしめよ剛毅質朴は青年の本領なりと、叫ばしめよ剛毅質朴の美名に迷溺して、眞人間の意義を忘れたる人の子は禍なる哉と、更に絶叫せしめよ剛毅質朴は己に時代遅れなり、新青年たるものは速に之れを除去し盡すべしと、知らずや山頂に立てるの人は一度は山麓の人なりしを、山上の景と山麓のそれとは同日の談に非ざる也。

○「汝自身を知れ」を以て人間存在の根蒂を説明するものこそせば、青年は青年自身を知るべき事の如何に意義あるやを思ふべきなり、自己を顧るものは人權の天則を見る、之れを青年として見れば即ち如何、剛毅質朴を謳歌するものと呪咀

今にして彼を讀し、彼を高唱せずむば非る也。青年の血と涙との横溢する所、其主義に殉するは最も會心の快事なり、古來宗教發展の歴史、または社會改良事業進化の經路を尋ぬるに、其自覺せる主義に殉せるもの、殆ど指を屈するに暇あらず。然して刻下の青年に、この熱血ありや、この眞摯ありや、自己の主義の爲めに、其身を犠牲とする勇ありや、黙々として愚のごとく、熱烈狂のごとき主義の人は、那邊に求めて之をわむや、嫋々たる八方美人主義、圓轉骨脱の如く、利口捷給滑稽洒落、お招き猫のごとき、我つひにこの輩の煩に堪へず、

龍山麓の宿舍、三百の健兒を宿す、夜靜かに更けて電燈暗き寢室より洩るゝ聲をきかずや、三更月に悟めて、友と道を語る聲に非ず、東亞の風雲を談ずる風發の壯語にあらず、饒々たる多舌、相語る所は片々たる相互の惡口なり、不潔なる滑稽なり、生地なき訛謗なり、淺薄なる

利己のみ、あに偉大なる主義あらむや、剛毅朴訥は一種の主義なり、此の主義龍南に横溢せる時代でありて、意義と活動とありき、責任と價值とありき、然りといへいへども、時代は間斷なく進歩す、只剛毅の風旺盛なりし、當年の龍南をのみ謳歌し、現時を呪咀して止まは、むしろ吾人の堪へざる所、更に偉大なる、嵩高なる、更に絶美、透徹なる主義を、刻下の龍南に要求するものなり、

(天戟)

### ○洪鐘錄 (其二)

○天下唾棄すべく罵倒すべきもの多しと雖も、未だ青年の青年らしからざるもの程然かく甚しきを見ざる也、之れが例證を數へ來つて詳細の説明をなさむは敢て難事に非ずと雖も、吾人は

するものと共に來つて之れを見よ、悲しい哉人間の意義の解せられざる事や、更に慟哭すべき哉青年の意義の没却せられたるや、吾人は茲に一案業を下さむ、曰く青年の本領眞隨を極め盡して、あらゆる意義の源泉たるもの唯一「熱血」なるものに外ならずと。

○云ふまでも無く青年は人生の一時期なり、昨の少年は今の青年なり、今の青年は次ぎの壯年なり、老年なり、故に人生の意義は亦青年のそれたるべきは火を睹るが如く明かなり、然れども少、青、壯、老各々その特長を有す即ち本領あり眞隨あり天國に入るを許さるゝ少年兒童は決して早熟青壯年の如きものに非ずして、天真爛漫、一点の邪氣なきものに外ならず、之れ少年の本領なり意義なれば也、青年時代は之れを花に譬ふれどもそは満開の花に非ずして、正しく苔のそれたるべし、苔の苔たる所以は何ぞ、内に幾多の色と香を含むで満開の花たるべき要

素に充ちたるもの、而して青年の色と香とは或は剛毅質朴ならむ、或は勸儉尙武ならむ、その根蒂の要素は實に唯だ「熱血」に外ならざるのみ。

○熱血發して萬丈の光焰となる、以て天を焚くべし、熱血動いて千里の大江となる、以て地を浸すべし、日帝國今や萬邦に卓越して、東洋の平和と人道の正義とを揚言すと雖も、眞個日本人にして熱血なくむば之れ空中の樓閣のみ、幸にして吾人は今回の大事に於て三尺の童子と雖も尙はその小軀に多量の熱血あるを見たり、請ひ問はむ或る一部の青年諸子、青年なるの自覺ありや。

○圓滿の洒落とは直ちに以て老年と壯年との本領なりとするを得ざるべきも、然かも當らずと雖も遠からざるべし也、人と爲り圓滿なり洒落なるものあるは勿論なれども、その眞個の價值は社會の風波に漂ふて、幾多人生の經驗ある老

年及び壯年時代に完成するを得べきなり、未だ青年時代に於て必ずしもその要を見ざるなり、若しその要ありと主張するものあらば希くばその圓滿と洒落とによりて青年の「熱血」を傷ふ事勿らしめよ、吾人は或る一部の青年諸子がこの圓滿と洒落とを乱用或は謬用するの弊は遂に「熱血」を没却するに至る事無き乎を恐るゝもの、希くば犯人の憂たるに止めしめよ、吾人は云ふ圓滿と洒落とは將來の事、今は唯だ熱血のみにて足れりと。

○何等の痴漢ぞ人の剛毅質朴を唱ふるや立どころに附和雷同して然かもその實行の如何に至つては楚人が越人の肥瘠に於けるが如し而して曰く吾れは圓滿なりと、何等の沒曉漢ぞ人の剛毅質朴を唱ふるや直ちに論難攻撃して、然かもその本領に至つては恰も隙中の鬪を見るが如し、而て曰く吾れは洒落なりと、語を寄す、郷等は未だ青年なり、圓滿と洒落とを云ふ以前に、先

づ青年の本領「熱血」に思ひ至らずや、然らずんは遂に青年たる所以を如何。

○是に於て乎最後の斷案は自づから來る、乞ふ剛毅質朴を云ふもの云はざるものも將た又難するものも共に來つて熱血の前に立て、熱血の青年たれ熱血の人の子たれ、斯くて後更に剛毅質朴を標榜し頌歌するものも滿腔の熱血を以てせよ、剛毅質朴を評論し攻撃するもの亦滿腔の熱血を以て對せよ、かくて龍南の天地をして眞個熱血の戰場たらしめばその勝敗の如何に關せず、蓋し之れ近來の一大快事たらずんばあらず、假りに一步を譲りて『否剛毅質朴黨』をして大勝を得せしめ、龍南在來の史美を打破せしめむも、敢て辭する所に非ず、蓋し「熱血」の手によりてなされたる事は青年無双の月桂冠を値ひすべき大業なれば也。

○若し夫れ剛毅質朴の威風堂々として龍南の天地を壓するに至らば、この戰鬪の結果として先

きの敵者は、翻然その非を改めて、更に從來の熱血を以て一大同盟を結ぶべし、暴風雨一旦霽れなば、光輝燦然たる天日を仰ぐを得む、雨降つて地固まる、斯くの如くにして所謂圓滿と洒落とは一轉して、眞個熱血の結合と大塊とに變形せむ之れある哉。

○あゝ青年が青年らしき大戦によりて、更に青年らしき同盟を形來して、龍南の天地は「熱血」に充ち満ち、巍然として天下青年の中堅たらむは、吾人滿身の熱望なり、蠢々として徒らに團栗の脊比べに浮き身ぶ孕せむよりは、來つて熱血の子となれ、熱血の子となりて青年の本領を發揮せよ、剛毅質朴斯くの如くにして光彩あらむ、吾人は徐ろに筆硯を洗ふて來るべき眞青年の眞發展を見て、更に猛虎一聲の大音に諸子が心膽をきたい呉れむ、あゝ熱血なる哉（星の子）

## ○信仰の人たれ

現時我國の宗教界を察するに實に驚嘆に堪へたるものあり。先づ佛教に就て云はんか、彼の東本願寺法主の墮落は斯界の全豹を推するに難からず、眞如を渴仰し、淨土を欣求する彼の信念は已に已に緇徒の胸中より雲散霧消して、神聖なるべき寺院は往々淫を誨ふるの魔窟と變じ、僧侶は唯葬式の世話役、經文の暗誦者たるに甘んじて、衆生濟度の大天職にはへ顧だも與へざる也。而して又佛教信者と稱するもの、死後の冥福を冀ふて、佛名を誦し金錢を喜捨するの外、一の信仰なく、所謂一個の利己的迷信者たるに過ぎず。進んで儒教を見よ、彼の我國の精華たる武士道の根蒂を形造り、社會思想の潮流を支配し來りたるもの、今や則ち如何の狀ぞ。唯其形骸のみを存して、その本旨は已に煙滅に歸し、又昔時の倂を見るべくもあらず。最後に其督教を察せよ。斯教の我國に入るや日猶淺く、其信者未だ多からず、而も其牧師信者の徒、徒



徒らに儀禮の末に走り、自律を忽諾に附し、消極的品性を維持するものあるも、精神的道德を修むるに意なきが如きもの、甚だ尠少あらざるが如し。此の如くにして果して新生命を發揮して、匡世濟俗の大主旨を完ふするを得る乎。嗚呼觀じ來れば彼等は肉慾の満足を心靈の應護に藉らんとし、信仰の二字を濫用して罪惡を行ふの媒介たらしめんとす。斯の如くんば佛陀の慈悲、基督の愛も、儒教の忠孝も、畢竟五錢の白銅貨に若かざるに非すや。彼の天理教の如き邪教が、愚夫愚婦を蠱惑する手段の如きは、無信仰の國民、利己的國民の性情を發揮して殆んど遺憾なきに近きを見るべからずや。

信仰なき個人は常に利己的也。利己は罪惡を孕むの卵巢にして、不義を産むの母胎にあらずや。争鬭、譎詐、姦淫の諸惡到處に行はれ、名と金とを以て畢生の目的となし、一日の計画に拘々乎たるも十年の成算を慮るものなく、十年

の企劃に汲々乎たるも百年の未前を察するものなく、生前の福利を趁ふに齷齪として死後の榮冠を忘却し去るが如きは、これ則ち無信仰の必然的結果にして、利己が齎らし來る運命の自然のみ。明治今日の個人は此因果律を明示するものたるなからんや。國民品性の墮落は此天道を藐視したる膺懲たるなからんや。

信仰とは何ぞや、自ら望む所に毫末の疑点を抱かずして、未だ見ざる所を憑據とするもの則ちこれ。己に自ら欲する所を疑はず、故に善く物質の羈絆を罷脱して、超然高舉、理想の樂園に逍遊するを得る也。己に未だ見ざる所を憑據とす、故に現實の煩瑣を絶して永劫の生命を享受するを得る也。然れども此に思を致さざるべからざるは、信仰は直に主義其者にあらざることは也。

信仰は主義をして生命あらしめ活力あらしむる所以の根蒂にして、宇宙の本脉に融化し、永久の眞理を攝取するものにあらずんば、之を語

るの權利なく資格なきや固より論を俟たず。漫然主義と稱し、理想と唱へ、神と呼び、愛と稱す、前人の糟粕を嘗むるにあらずんば聞き囃りの附和のみ雷同のみ、淺薄なる人生觀と、漠然たる世界觀とを把持して能事了れりとなすもの愚や遂に及ぶべからず。宗教の有無は必ずしも信仰と相關せずと叫べる知名の士を有する我帝國は禍なる哉。

憐れむべきものよ汝日東帝國の國民よ、汝妄に戰勝の榮に酔いて東洋の霸國と誇稱する勿れ、汝は悠々たる二千五百六十五年の間、一の大哲學者を生せず、一の大宗教家を有せざるを思へ。嗟乎既往は趁ふべからずとするも、然れども吾人は來者に滿腔の希望と期待とを寄する能はざるを奈何せむ、今や王師滿州の野に赫々たる偉勳を奏し、列強をして張膽明目せしめつゝあり、此時に當て嘗に此眼前の榮譽に心酔するものとなく、茲に大に覺醒して、良心を喚起し、本

能を砥礪し、輕佻を去り、浮華を捨て、尤も眞面目に尤も謙遜に、この人生の大問題に向て周到なる思考を費さざるべからず。殊に身學窓にありて高等の教育を享けつゝある諸君に向て、吾人は這般の問題に關して、大なる熟考と靜慮とを要求す。戰勝の大國民としての日本國民と、信仰上に於ける大國民としての日本國民と、其大小輕重果して孰焉ぞ。吾人は戰爭上に於けると等しく、信仰上に於て之と匹敵するの成果を爲し能はずとは信じ得ず、果して然らば信仰上に現今の如き陋態を極むるは寔に痛惜措く能はざるに非ずや。吾人は戰爭上と信仰上と相俟て、茲に始めて大八洲瑞穗國の光彩陸離として八紘に光輝するを信するもの也、單に一方面的みに偏するは是れ不具の國民也、斷して吾人が贊美する日本國民にあらずる也。此に於て吾人は基督の神と釋尊の眞如と其何れを對象とするか、その何れに歸趨するかは、吾人の強ふる

所にあらずと雖も、唯其何れにか信仰を撃ぎ、立命を托せざるべからざることを絶叫せざるを得ざる也。信仰なき人は墮落し信仰なき國家は亡滅せむ。吾人の踏める地は、やがて吾人の肉軀を呑み、吾人の頂ける天は、やがて吾人の靈を托すべき所以に想到せば、吾人豈徒らに醉生に夢死の癡態を演ずるに堪ふべけんや。

寄語す龍南八百の健兒！。利己を去り輕佻を捨て、以て大なる信仰の下に活動する人たれ、依て以て大信仰に彌蔓する國家を現はせ。然らずんば戰勝の光榮も、槿花一朝の榮たるに過ぎざるべき也。

(夜の人)

### ○眞の理想

理想は人生の爵位也。而して實現は理想の本性なり。蓋し實現を内包せざる理想はこれ眞の理想にあらず。眞の理想は現在と衝突を爲さずして却てこれに打勝つもの也。世人彼の似而非な

る理想を玄し、以て現在と衝突を來たし、五尺の軀軀と五十年の生涯と擧げて、一に其鬭争の修羅場に供す。彼等は世を果なみ、生を厭ひ、終に或は自ら現在と永訣す。其公事に發するものは汨羅に投じ、その戀愛に囚するものは瀟湘に入り、其不遇に出づるものは長江に寄る、其必其情極めて憐れむべきにあらずや。これ則ち理想にあらずる理想を追求せるが故のみ。眞の理想の追求に至りては活動あり、進歩あり、快樂あり、低きに居て高きを忘れず、近きに在りて遠きを想ひ、向上の氣常は胸裏に輝きて、英氣外に溢る、常に人生行路の荆棘を患へざるのみならず、我に限りある身の力ためすべく、憂きことの尙此上に積り來らんことを希ふ也。これ眞の理想は人生の行旅にありて歩一步その實現を期し、其處に幾分の自己充足を得るものなれば也。想ふに此世は所詮現實の世界にして、吾人は現實の人間なり、理想にして徒らに高きに

過ぐる時は、之を追求するに及んで唯煩悶あるのみ、彼の大牢の珍珠を望まんよりは一片の麴麴を手にするに如かずとは、正に此弊を道破し得て妙ならずや、而かも眞の理想は近きにあらす、輕々しく容易に達し得べきにあらず、そを組成せる分子は極めて卑近なりと雖も、そが全部は宏遠にして遼大也。吾人が遊隋放逸なるとき、そは次第に黒雲に蔽はれて那邊にあるやを知るべからず、若し夫れ吾人が汗と膏とを以てするとき、先きの姿を隠せるもの、忽ち炳乎として眼前に現はるゝを見る也。斯の如く眞の理想は一面神の如く崇嚴遼大に、然かも他面吾人と親しく握手するものならざるべからず、此眞の理想を想望し、期待し、憧憬し、努力してこそ電光石火の時日も足らずとなさず、露の干ぬ間の朝露の命も短からず、限りある五尺の肉体を逝水泡沫の間に處して、しかも尙優に無窮の生命を認め得るなれ。

優柔不斷俗をなして徒らに日をば送りて、似而非ある理想を立て、嬉々然たる世の痴者よ。來れ、眞の理想は見えずとや、捕ね得ずとや、そは汝が眼前にあるものを、さても意氣地なき奴共かな、げにそは望遠鏡にて見るべくもあらず袖手傍觀して捕ね得るよしなし、汝若し見んと欲せば、先づ汝が額に汗せよ。汝若し捕ねんと欲せば、更に進んで自から天與の貴重なる苦痛困難を拜受するの光榮を上帝に感謝するの眞心あり、苦痛困難多ければ、これに従て愈々益々不可言の甘味に舌鼓するの境域に到達せよ。

(夜の人)

## ○未來の觀念

未來の觀念は社會及び個人を導くの燈明臺也。社會及び個人の事業を完成せしむるの奮興者たり。克己の念、屈節の意、何れか未來の觀念より湧出したるものにあらざる。期するあるの胸

量を有せしむるものは何ぞ、未來の觀念にあらずや。報するあるの浩懷を存せしむるものは何ぞ、未來の觀念にあらずや、然り吾人の生命をして無極に繋ぐものは實に此未來の觀念にあり。夫れ社會の進歩は漸然的にして急進的にあらず、豈唯社會のみならんや、天下の事物は此漸然的傾向を具有せざるもの甚だ罕なり。漸然は晩成を意味し、晩成は未來の觀念なるものを意味するにあらずや。已に然り社會の事物否天下の事物が漸然的軌路、則ち未來の觀念を閑却せん乎、勢ひ急激的方面に力を用ゐざるべからず。急激は無慮を意味し、無慮は危險を意味し、失敗を意味す、かるが故に行路嗟跌多く、從て又損傷多く、遂に滅亡にあらずんば、困窮の悲境に際會して止む、嗟呼未來の觀念を失へるものは憐れむべきかな。然れども誤解するなかれ、吾人は單に未來を思へと云ふにあらざる也。吾人は唯現在の義を盡して、未來に處するの責任

を思ふと叫ぶもの也。換言すれば現在の職分を爲し盡して、未來の職分あることを忘却すべからず、則ち未來の觀念を忘却すべからずと云ふにあり。古歌に曰はすや『明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半に嵐の吹かぬものは』と、三十一字、現在の職分を盡して、未來に延ばすなかれとの眞理を反面より道破して餘蘊なきにあらずや。世人之を以て未來の果敢なきを歌へるものとなす、妄も亦甚しいかな。然れども滔々たる今日の人心穿ち來れば多くは此の如きのみ。社會は汚濁し、腐敗し、人心は沈滞し、墮落す、また何ぞ怪しむを須ゐむや。藤原義孝の歌に曰く『君が爲め惜しからざりし命さへ、長くもがなと思ひけるかな』と、見よ道理を絶せる戀愛も、またその最も活動せるものは、此の如く未來の觀念を憫況す、人空しく現在に死すべけんや。

(夜の人)

## ○確固不抜の觀念

人吾人に我國民が最も缺如せるものは何なりやと問はば、吾人は確固不抜の觀念は正に其なりと答ふるに躊躇せじ。古來我國に一の大思索家なく、隨て特有の哲學の組織なきものは、其確固不抜の觀念を欠ぎ、外來の刺激に動かされて、轉々推移する思想を有する國民たるを証するものにあらずや。是れ確固不抜の觀念を具へざるが故に外來の刺激に動かされ易く、其隨時の變動に從て推移するが故に、沈思默考して、天地に參し、萬象の幽玄を闡き、隱微を發きて、遍通の眞理を得んとするが如き暇を有せざるを示すもの也。佛教入りては靡然として之に趣き、儒教傳へられては一に是が崇拜に餘念なく、殊に維新以來近年に至りて、其確固不抜の觀念に乏しき現象を益甚しきを見る。西洋文明輸入せらるゝや、國民は滔々此皮相なる物質的文明に幻惑し、之を摸倣せんことを是れ勤め、之

が弊害の如何に怖るべきかを顧みるに遑なく、一意之を注入したるの結果は、社會に教育に其他に弊害百出し、將に耐ゆべからざらんとするに至りて、此に國家主義の唱導を見、大に反省する所ありしと雖も、病膏盲に入りて遂に救ふべからず、遂に今日の頭重輕脚の病的文明を馴致せるに至れるは、皆確固不抜の觀念を欠くに因せずや。之を社會に見んか、法網を潜り非行を働き、法律上の罪人たらざる限りは道德上の罪人たるものも人之を咎めず、反て或は才子、紳士などゝ世に持囃さるゝに至る、如何なる社會の罪惡を犯すも『人の噂も七十五日』社會制裁の薄弱なる、假令法律に觸るゝなきも惡を惡とし醜を醜として、永遠に指彈し惡むことなく、直に忘失し去りて社會の罪惡をして益増加せしむるもの又確固不抜の觀念に乏しきが故なるなからんや。夫の教育が西洋思想の輸入と共に、偏に智力注入の教育に偏したる果として、人心

は物質的に流れ、冷刻に失し、温和なる感情、健全なる意志を有せず、唯知識以外些の餘裕なき不具の國民を造りて、社會に漸次物質的傾向を益さしめしもの、此れ上掲の觀念思想に欠くの過誤に所せずんはあらず。吾人は實にかゝる教育によりて育成せられ今猶教へられつあり恐らくは今後亦然らん。吾人は大にかゝる教育の足らざる所を自ら進んで補い、以て完全なる人たらざるべからず。此目的を達せんには須らく外國語以外、數學以外、所謂教科目以外、更に一步を進めて自個靈性の鍛鍊に力を用ゐざるべからず。吾人は一方に於ては美の神に捧ぐべき樂しき時間と、一方に於ては動物的に業務に服すべき苦しき時間とを有するにあらず。しかも睡りの中に於て夢みる時の一瞬時なるが如く、美の神に捧ぐる時間の僅少にして、働きの時間の甚だ長きを恨む。只惑ひべし。營々として額に汗し、吸々として業務に服する彼等多

くの輩が一瞬時だに快樂あり、光明ある美の神の福音に接する能はざることを。吾人は怪しむ高等の教育あり修養あり、一般人に對して精神的陶冶を受くることの遙かに多き龍南の或一部分の人士が、鄙歌俗謠を得々として大聲放吟して恬として耻ぢず、オツチヨロチヨイや、似而非なる所謂美的會合にうつゝをぬかし、七寶堂や余根屋にかけ上りて、彼等の所謂精神的満足を求めむとするを。何ぞ夫れ陋劣あるの甚しき。龍南既往の歴史に顧みて少しく耻づる所あり。

嗚呼染め易きものは褪め易し、確固不変の觀念なきものは寔に此の如き悲境に沈む、而して是れ吾國民の一般に缺如する所にして、不幸にも吾人も亦我國民の一員として此通弊を有せるを知らば、吾人極力以てそが涵養に力るは、最も美なる最も效果ある所業にあらずや。今や幸か不幸か其弊風は延びて我龍南の聖なる殿堂に

波及せむとす、若し夫れ此の如くにして止まる所を知らずんば、邦家百年の大計、否龍南のいと貴き氣風、夫れ何れの日にか立することを得んや。遮莫吾人は事物の變化を排するものにあらず、變化推移は進歩の階梯なり、唯要は確固不叛の觀念を有して外來のものを其鑄爐に鎔解して、其長を取り優を抽きて以て我美を増すにあるのみ。

殷々閃々時に天地の冥合することあるも、忽ち颯然として皎月を觀るが如く、龍南の光明や、時に妖雲の遮蔽あるも、焉んぞ知らん千古嚇々として眩ゆきばかりなる光耀が龍南の天地より發射するを。尙も精氣溢るゝ龍南の丈夫たらむもの、外來汚濁の思潮に感染することなく、超然として時流を抜き、來るもの之を拒まずと雖も悉く之を龍南化せしめざるべからず。之を爲すには確固不叛の觀念は必然的要件たるを見る也。吾人はそが涵養の手段として唯獎めんと欲

するものは上述の教科目以外、已れが靈性の開發に力を吝まざらむこと則ち是れ也。諸君にして學校教科書以外。他を顧みるの時間なしと云ふは口實のみ。諸君は習學寮圖書室裡紅葉全集を繙きて猶繚々として餘裕あり、遂に通町まで態々入浴に出懸くるものは、其矛盾を証明して餘りあるにあらずや。吾人は望む、唯須らく些少の時間を約して靈性の鍛鍊に費さむことを、之れ則ち多くの時間を約するの途なり。かくして始めめて確固不叛の觀念は無意識的に涵養せられ、遂には諸君が牀内に牢乎として動かすべからざるに至らむ也。

(夜の人)

### ○活人と死人と

世上何ぞ精神的死人の多きや、何事も考へず何事もなさず、毎日毎月毎年、同じく食ひ同じく眠り、此の如くにして百年の壽命を重ねるも、彼の半風子と又何ぞ撰ばむや。



活人とは精神的活人を云ふ也。身軀は垂死の境に在るも、猶精神の活動は潑刺として健全に、時々刻々に小兒の如く生れ變れる人は偉なるかな。見よ彼等の世にあるや、常に活動也、常に勤勉也、常に奮闘也、常に苦戰也。事業に向て、理想に向て、信仰に向て、藝術に向て、そこには必ずや、發見あり、創造あり、闡明あり、改革あり、普及あり、功績あり、一分一秒幾千の痕跡を遺さずんば止まざる也。今の世大學を卒へて學士となりすまし、もう是で安心と美しき細君を迎へて寢酒を飲んで陶然たるが如き輩は、是れ死人の好標本と謂つべし。一時一刻希望を生じ、常に新生涯を欲望して止まず、逆境に奮闘し、苦戰し、忍耐し精進して向上の一路を辿るものは翻々たる凡物の能ふ所にあらず、之に堪へ得るものは是れ活人とは云ふ也。奇僧一休曾て歌うて曰く「門松は冥土の旅の一里塚、めでたくもあり、めでたくもなし」と活人と

死人との別をいみじくも説破して昭々たるを見ずや。  
(夜の人)

### ○龍南の一美談

徒らに青春の意氣と希望とを呼號して、名を貪るに汲々たるも、終に情の何たるを解せざるの徒は、竊かに二星霜を學寮の一隅に送りて、聲なく名なく、しかも隱然としてそが玉の如き温情を示しつゝありし一青年によりて、大に學ぶどころなかるべからず。青年が誰とかなす、益川熊一郎氏其人也。我をして未だ氏を知らざる者のために、聊か説くところあらしめよ。  
米澤某氏(今は校にあらず)は氏の一友也。かつて病を得て寮の病室に入りしことありき、時恰も一年の修業試験に際す。加ふるに故郷よりの通信は一の憂ふべき事情をもたらせり。悶々何ぞたへむ。しかも幾多の友は辭書とノートとの外に省みるべき隙なきを如何せん。此時に當り

事實は之に止まらず。曾て氏と室を同じうせし堤某氏、頃日恐るべき病魔に犯されて病院に送らる。此時に當りてあらゆる幹旋の勞を取りしは即ち益川氏也。しかも、數旬の間、半里の道程を往復して其の病狀を訪ひ、殆んど寧日なしと云ふにあらずや。讀者乞ふ之を以て尋常二様の事となす勿れ。余は茲に一の材良を與へて氏の面目を髣髴せしめん。去月の事なりき。あ

百九

せざるの世、僅に九旬の交友よくかくの如きに  
至るもの、到底これ尋常一様の青年が爲さんと  
して爲し能はざるところ。余は茲に、益川氏を  
弟子とする諸先生と、益川氏を友とする會友諸  
君との光榮を思ふて、大聲龍南の彩華を歌はん  
と欲やる者也。

終りに於て余は諸君に玄海の波あらしき壹岐國郷  
の浦の名を記憶せられむ事を希ふて止まず。

附言——余等雜誌部委員の任に當りし時、熱罵  
を逞くして諸子の怒を買ふ事一再に止ま  
らざりき。しかも余等は美を見て黙する  
者にあらざるを宜言し置きたり。今やこ  
ゝを事實に示すの機會に接す。歡喜何ぞた  
へむ。 敬具。

(愚民)

## ○天山兄に與ふ

天山兄足下、龍南會雜誌第百〇八號に記載せら  
れたる兄が「新らしき友」なる一文を讀み思ふ所

あり、こゝに一篇を兄が座右に呈して我が所存  
を明かにしいさゝか兄が爲に云ふ所あらむとす  
、宏量なる兄が一顧と示教を、我が信してゐた  
が、はざる所也。

足下云へらく、「友を得たる者よ、汝は哀れむべ  
き哉、友を求むる者よ、汝はそれ危ひかな、何と  
なれば汝等は人に肉あることを忘れたれば也」  
と、而してうら優しくも我れに與へし友が情に  
あこがれよろこぶは、そが千里影もあらぬ沙漠  
の中にさまよへる者にして計らずもオーシスの  
清く新きに酔へるに等しと、あゝ誤らずや、例  
へそは世の波風のあらきに曝されずとも、春風  
一度うごいて淡紅色の櫻花一朵、清けき春の曙  
に匂ふを望みて、たれかはそのうるはしき花の  
影に、散りて飛びて舞うて降り來る花吹面に洛  
びて、杳かにも襲ひ來る野の香に縹緲たる天國  
を思ひやらざりしか、友はし誠の友は、かの清  
けき山櫻の春に逢ふて得ならぬ香をば湛ふらむ

様に、我を引きて、木の下かげに一夕のうれひあらしむるを、あゝあらぬ道に踏み迷ふて、花とも云はゞ云ひつべき、友の情を惡みて、サタンにも等しからむ様に思ひなし玉ふこと、我れのうけひき得ざる所なり、足下又云へらく、「人は何の故に友を求むるや、意の方面より觀察して得たる解答一、教訓をねむがため也、情の方面より觀察して得たる解答一、慰藉をねむが爲也」と、あゝ足下よ、足下はかくの如く逞慾と

利己の方面よりして、そが眞の友をねむと試み王ふか、宜なり、兄が心の一隅聲をあげて汚れたる塵界の友を去れと叫ぶことや、兄が心すでに逞慾と利己の塵念に充たさる、之を如何ぞそが心の友を得る事を得むや、兄よ、若し其至情相通するの眞友を求め樂しまむと欲せば希くはそが胸にわたかまれる、慾心を脱却せよ、教訓も求むるを要せず、慰藉も求むるを要せず、たゞ浮世に二つの自我を求めずや、求め得ずばそ

れまで、友を有せずと世に誇らむも可なり、友は我が一半なり、かく思ふとき、友を得たるが故に哀むべき身ともならず友を求めて危きこともあらざる也、

足下よ、足下が説き玉ひし自然と偉人こそを友とすることは、我が雙手を舉げて賛する所、加ふるに花美はしき人を得て友とせむこと、そはいかに心ゆくべき事なるべき、我れ未だ親しく兄と面晤したることあらず、兄が人物の如何なるべきを知らずと雖、自我の一半ともなるべき者を求むること市場に青物を選ぶがごとく容易なりと思ひ玉ふは足下の失慮のみ、必ずやそが會心の友を得玉ふ時あらむ。何んぞ茫々として限なき沙漠に入りてオーシスの綠草を求むるを要せむや。春風天山の一角に渡り來る時、櫻が岡べ、花と美はしき友をね玉ふべき也、頓首、

(四月十九日、松の葉生)

## ○中堅會を迎ふる辭

中堅會員諸君。余は諸君の會員にあらず、たゞ余が修養の方法諸君の其れと、聯か相異なるものあれば也。然れども諸君、此の言を以て直ちに諸君を侮辱し、已れを高ふするものとなす勿れ。たとへば諸君は茶を喫り、余は水を飲むとす。るも、其の渴を癒すの目的に於ては些の異なる所あらざれば也。然るに道塗説をなすもの相接いで曰く、「我が五高已に龍南會あり、八百の健兒會長閣下の下に徳を磨き業を勵む、程度の差こそあれ八百の會員みな等しく修養の功を積みつゝある中に、たゞある種の方法によるの故を以て、自己のみ校の中堅たるを得るかの如く孤尊するは、これ我が龍南會員を侮辱するものなり、會長閣下の不徳を公言するものなり」と。余も亦諸君が此の名稱に對しては聊か慊焉たるもなきにしも非れど、これが爲めに諸君が自信と抱負と勇氣とを藐視して、龍南郁々の文を破壊

せんとする如き没曉漢に非ず。況んや諸君が堂々たる三章の宣言は、實に諸君が主張と宏懷とを闡明して、かの一時人をして不快の眉を顰めしめし、偏狹修養者の瞑瞶を打破して餘りあるに於ては、余も亦た思はず案を叩いて快を叫ばすんばあらざる也。嗚呼榮ありし龍南の天地、これより更に諸君が爲めに紅を點じ紫を錯へて、こゝに天下青年の爲めに清淨無碍の理想郷を現出せんこと期して待つ可く、慶す可き覺醒の曙光は夫れ諸君の身邊を繞りて赫奕たるものあらん也。余はこゝに余の不敏を以て諸君の抱負と前途とを云々して管見蠡測の愚を敢てせじ。願くば諸君諸君は此會を組織して修養のことに努むるを以て、龍南會員、また他に龍南の精神界を負ふて起つものなしとする如く孤尊なる勿れ。諸君が此の旗幟の下に精神の修養をなすを以て、他の龍南會員は無定見無主義また探る可きなしとする如く偏狹なる勿れ、更に余が無禮を

容○諸○君○修○養○を○標○榜○す○る○も○其○意○義○を○誤○ま○り○  
 て○虚○儀○虚○飾○世○の○所○謂○似○而○非○修○養○者○と○な○る○勿○れ○  
 諸○君○已○に○斯○の○如○く○大○な○る○自○信○を○以○て○號○呼○す○る○以○  
 上○諸○君○は○已○に○業○に○如○上○の○凡○々○辞○を○了○し○て○餘○り○  
 ある○は○余○の○愚○も○知○る○に○苦○ま○す○と○雖○も○野○人○は○喜○  
 び○に○會○ふ○て○口○を○噤○む○能○は○す○這○回○の○諸○君○が○壯○快○  
 事○に○對○し○自○ら○揣○ら○す○た○猷○芹○の○微○意○を○致○す○の○み○  
 、○嗟○呼○諸○君○の○前○途○ま○こ○と○に○光○明○に○輝○け○り○諸○君○  
 が○諸○君○の○爲○め○に○は○た○龍○南○の○爲○め○に○有○終○の○美○  
 を○濟○さ○ん○の○時○は○夫○れ○徐○ろ○に○雙○眸○を○刮○り○て○待○た○ん○  
 かな○妄○言○當○死○乞○ふ○恕○せ○よ○

(小鬼)

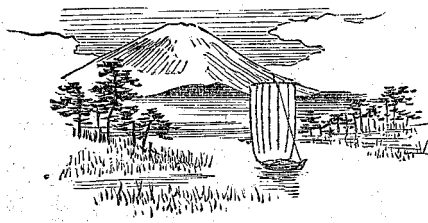
凄々遊子苦飄蓬

明月清樽祇暫同

南望千山如黛色

愁君客路在其中

(皇甫冉)



## ○編輯室より

○樂屋覗きも時に取ツての御愛嬌さ、こちから推察仕ツて、茲に暫く御目通り、三人の記者が水入らずの太平樂、沈香も焚けば屁もひるなり、神聖なるも然かも塵まみれし編輯室、やれ校正の雜報のさ、思へばこゝも浮世なりけり。

○芒村風流の志ありてか、一夕盆栽の薔薇を求め來つて大驚悅、頻りに同人の賞讃を待つ、鳳章即ち歌つて曰く、「紅にセーんの春を忍べさや、名なし男の子に花の香甘き」と、評に曰く、是れ鳳章一代のへなぶりさ、歌の心は知る人ぞ知る。

○何一つ飾りけのない室へ、この芳香馥郁たる、花がわかれたので、其晩の騒ぎは非常なもの、遅くなつて歸つて來た、嶺南が、ドアを明けるや否や、鼻をひこつかせて「あ、いい匂がしまずね」。鳳章「花の香甘き」とか、何とか云ひながらキッスでも、やりかねまじき血相、「たべちゃいけない」など、芒村頻りに心もさながらける。

○二三日たつて、鳳章は歸省し、芒村は他行し、夜になつても、誰も露にあてゝやるものがない、歸つて見るこゝは如何に、色も香も已にむなしく、机上は落花狼籍と云ふ有様、今は室隅に押しつけられてゐる、

○滿覆先生曰く「It is not always may」寢さ可し

く、食ふ可しく。然し幸なる哉、誰一人異議を稱ふるなし、蓋し天下太平、

○二人他行して薔薇壇保護の任に當る嶺南、二夜を住吉あたりまで浮れあるきて、留守居の淋しさを味はせしは此始末、露興へざりしを責むる芒村鳳章は蓋し茶屋〇の味を解せず焉。

○洒落か悟徹か、滿幅先生、眼鏡をやめて速りに鼻髯の延ぶるを威張る、而かも夫子自稱の美髯の下より食ふ可し寢る可しを聞くに至つては、未だ妨つちやん可愛らしき所あり。

○雜誌記者位では滿幅の經倫施すに由なし、あく空しく風雲を望んで、未だ手のつけやう無きに苦しむ、若かず暫く忍んで之れを寢食に漏らさむと、嶺南芒村之れを讀じて曰く、佳なる哉先生と、滿幅先生の號即ち起る、然かも先生時に氣に喰はざる事あれば八ッ當りに當り散らして、鋒先その鼻ッ柱よりも鋭し、芒村嶺南相顧みて曰く、何だこの滿幅野郎と、先生と野郎ハツキヨイヤ。

○芒村は靈活、故に清、嶺南は快活、故に是明、鳳章に到つては敏活、故に斷、よく清なり、芒村は是れ好箇の文士、よく明なり、嶺南は是れ好箇の經家濟、よく斷す、鳳章は是れ好箇の外交家、三人相共に活は即ち同じ、宜なる哉、一道の光彩陸離として編輯室より發するや。

○各地に郵送すべき雜誌百十號と百十一號とを一束にして鳳

章昂然坪井局に至る、やがて悵然として歸りて曰く、百十一號は二錢でよかつたが、百十號は三十匁七分あるので二倍の四錢かゝるご局員いふ、貼つた印紙の外何物もなし、囊中は素より無文、仕方なし持ち歸れり、茲に於て夫子の外交術また三文の値なし矣。

已に「食はんか寝れんかな」あり、何ぞ「飲まんかな」の主張なからん、此の天來の一語聞くものは腕を振して曰はん郷等剛朴の子將に宣誓に反かんとするか、乞ふ憂ふ勿れ、一茶を飲まんかな」也芒村茶瓶と熟麥を買ひ來る、一人曰くあゝ、咽が渴く他の一人曰くあゝ誰か湯を吸んで來ればいいな、剛情と我慢とを唯一の武器としてこゝしばらくの睨み合ひ、蛙、蛇、蝸牛の三すくみとは正にこれ。

○又しても例の剛情問題、芒村頭が出来ぬとも益々ちれ出し、嶺南足を傷めて愈々やけとなる、滿幅先生獨り士瓶の底をさすりて笑つて曰く、「剛情に冷はしをすすする新茶かな」と、これでも俳句、

○下らぬ長談義に折角の愛嬌も嫌味と相成り候べければ、此の位に致し候て、最後に改筆一番、聊か報告せでら、變りましての御挨拶を述べて御別されし致し度候。

○今回は案外にも、りごりに芽出度き幾多の投書を頂戴仕り候て、編輯子一同欣喜奮躍さても申すべき嬉しさに接し申候、御

愛顧の程萬謝仕り候が、何卒末長く御見捨て無之様々矣も懇願の至りに御座候、

○申すまでも無之、投書は総て八百健兒の美はしき清き頭腦より成りたるものに候へば、編輯子もその全部を採用致し度き考へに候が、何分いろ／＼の事情の爲めにその一部は没書の止むを得ざるに至り候は遺憾千萬に候今回の如きは総て名篇傑作にて候ひしかば、殆んど全部を掲載仕り居り候、止むを得ず握りつぶし申候ひしは次ぎの二篇にて候が、その理由を記して一般投書家諸子の御參考に供し度候。

○美文野の香は一言に評し候へば、清疎さでも申し度、いかにもさつぱりと致して、ごやうに可愛ら所のはの見ゆるやうなる、な／＼に捨て難き趣あるものと見受け候、さ候へど慾を申せば今一息と思はるる節も少なからず、一篇の結構少しく單調に失せるに非ずやとの疑ひも挾まれ申候、美文としては如何はしき字句も間々有之候やうに覺る候、わけて申上げ度きは今少し原稿の文字を奇麗に御認め下さるわけには参らず候や、折角の妙文麗句もあれでは頓と讀む氣になれず候、假令編輯子は辛抱して讀み通すも、印刷子僧は涙乍らにその筆者を呪ふべく候、これは一般投書家にも御依頼申上げ候。

○雑文修養家(觀(錄洲子投)は一種の才筆面、黒からざるに候はれど、淺薄なる材料を捕へ來つて仰々しく宣ふは、憚り乍



ら王陽明をして之れを見せしむれば、將に何ぞか  
謂はむ、噫々全國の學校中斯くの如き投書をなす  
もの獨り足下のみに候はむ(暫く足下の口調を借りて申  
す)。錄洲子よ龍南の一欄は三面記事を収むる所に無之候、  
やれ修養家が四角張るの、屑で風を切るの、禮式が面倒の云  
ふ暇があり候はば、足下の才筆と爛眼とを以て今少し着實なる  
問題を拉し來つて、萬文の光焰を吐き給ふべし、徒らに人の微  
瑕を摘出して得たりとすは、斷じて男子特に龍南の健兒が事  
に非ずと存じ候、文に精彩ありと雖も慥しむらくば以て龍南欄  
を飾る能はず、故に之れを没さ致し候次第、不惡御了承下され  
度候。

○序乍ら投書は雜報の外、委員までは姓名を知らずる事と定め  
あり候條、何卒御忘れなき様願上候、申し忘れ候事も多々有之  
候べく、孰れ他日を期して茲に關筆仕候、讀者諸賢の健在を祈  
り奉る。

### ○寄贈雜誌書籍

榮城 第二十四號 佐賀中學榮城會  
無盡燈 第十卷第五號 無盡燈社  
渦の音 第九號 德島中學同志會

### 百十六

學友會雜誌 第十三號	京都第一中學學友會
北辰會雜誌 第四拾號	第四高等學校北辰會
經城 第十三號	廣島中學校友會
七生 第十二號	七生會
校友會雜誌 第八號	第六高等學校々友會
六合雜誌 每號	ゆにてりあん會
同窓會雜誌 第十五號	愛知縣醫學專門學校
校友會雜誌 百四十五、百四十七	第一高等學校々友氏
校友會雜誌 第三十七號	開成中學校々友會
家庭新聞	同社
九州之教育	同社
教育公報 第百九十五號	帝國教育會
教育時論 每號	開發社
嶽水會雜誌 第三十一號	第三高等學校嶽水會
ウイルヘルムテル	佐藤芝峰氏
京都大學一覽	富田定壽氏

寄贈雜誌を御覽になる事を希望の諸君は雜誌部にて、御一讀あらむ事を望む、

### ○三十七年度龍南會費決算計算書

收入ノ部

一金百貳拾七圓貳拾錢貳厘 前年度繰越金  
 一金三百六拾五圓拾錢八厘 名譽會員寄附  
 一金千貳百四拾八圓 通常會員會費  
 一金百四拾貳圓 新入會員入會金  
 一金拾六圓參拾七錢八厘 國庫債券利子  
 一金拾五圓六拾五錢七厘 預金利子  
 合計金千九百拾四圓三拾四錢五厘

支出ノ部

一金貳百五十四圓五拾五錢 端艇部  
 一金四十六圓五拾錢 演說部  
 一金貳百五拾九圓六錢 運動部  
 一金六拾圓五拾錢 弓術部  
 一金百參拾九圓六拾四錢六厘 擊劍部  
 一金百拾壹圓四拾壹錢三厘 柔道部  
 一金四百參拾貳圓六拾錢 雜誌部  
 一金三百拾九圓五拾壹錢七厘 無所屬  
 一金百圓 基本金繰入

差引

合計金千七百貳拾三圓七拾八錢六厘  
 金百九拾圓五拾五錢九厘 翌年度繰越

